

---

# 対照的な姉妹

星流

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

対照的な姉妹

### 【Zコード】

Z4562Z

### 【作者名】

星流

### 【あらすじ】

昔から、ずっと不思議だったことがある。

私達姉妹は、なぜこんなにも似ていないのだろう。

天才型でワガママ女王様の姉、咲良と、努力型でこき使われる平凡な妹、美月の日常。

恋愛もまつたり進展します。

## ワガママ女王様

小さい頃から、私は不思議にずっと想っていた。

そして、高校2年生となつた今でも、その疑問は消えず…むしろ、理不尽な遺伝子のいたずらに腹立たしさをを感じてしまつ。

「美月、私の部屋にある雑誌もひってきて。」

リビングのソファードで携帯をいじりながら、私に向かって命令する。長く艶のある茶髪にゆるいパーマを本日かけてきたばかりだといつ

私の姉、咲良。

「ベッドのそばのテーブルに置いてあるから、早くしてよ。」

現在、私は今日の授業の復習をしている。

リビングのテーブルで。

彼女の睫毛で覆われた大きな瞳は飾りなのか、それとも私が勉強していようが関係ないのか。

… 9割の確率で後者だろう。

まず、何様かと聞きたい。

「美月~。」

少し強い口調で急かすお姉さんに、無意識にも頬が引きつる。久しぶりに早く帰ってきた姉と2人きりでお留守番など、始めからいい予感はしていなかつた。

けど、さすがに私も我慢の限界だつた。

「さつあ、コーヒー淹れてあげたでしょー!その後、せつかく淹れてあげたコーヒーが冷たくなつたからつて、また温めさせたのは誰よー!」

私は椅子から立つて、あくまで冷静にお姉ちゃんに聞く。

「だつて、猫舌なんだもの。熱いコーヒー冷ましてたら、思いのほか冷めちゃつたんだからしようがないじゃない。」

「ちひりを見向きもせず、淡々と答える姿にまたイライラが募つた。

「じゃあ、携帯の充電器をもつて来させたり、お姉ちゃんの洗濯物

を干したり置んだりしたのは誰のお願い?」

家に帰ってきて、早2時間。この間、私は勉強できていないに等しい。

すべて、彼女の命令により使われた。

「私しかいないじゃない。母さんは買い物に言つてゐるし、お父さんは今日も夜勤だし。

そんな少し前のことでも、分からなくなるくらい記憶力がないのかしら?」

…もう限界です。

鼻につくような言葉運びで、蔑まれた。

その勝ち誇った顔に欠点があれば、もう少しこの怒りは落ち着いていただろう。

もしくは私の容姿が平凡でなければ、この敗北感は和らいだかもしない。

力の入る拳の行き場のなさに、わざとため息をもらす。

少しだけ冷静になれた気がする。

…気のせいかもしれないけど。

そして、ある結論にたどり着いた。

自分の部屋に戻つて勉強しよう。

お姉ちゃんの命令は無視。無視。何が何でも無視。

イヤホンを耳栓代わりにして、聴覚をシャットアウト。

これで、お姉ちゃんの声は聞こえない！

私は勉強道具を素早く片付けて、自分の部屋へと向かう。

つもりだったのに…。

「こんなもんしたつて無駄よ。この間のテストは誰のおかげで赤点免れたのかしら？」

…いつの間にか背後に立っていたお姉さんにイヤホン没収され、おまけに弱みを出された。

ええ…私の苦手科目である数学が前回のテストで90点の高得点を取れたのは、認めたくないけど、お姉ちゃんの教育のおかげ。

努力しなくちゃ覚えられない私と違つて、授業さえ聞いていればテ

スト期間など必要なかつた彼女の説明は、悔しいがめひやくちや分かりやすい。

「もうね、今月中ずっと私の言つとおりに動けば、来月の中間テストの成績が中の下から、上の中へいくことはなるかしら？」

「…雑誌をすぐに持つてきます」

私はまとめた勉強道具をテーブルにおいて、2階の彼女の部屋へと渡々向かうことにした。

めちゃくちゃ嫌みな言い方だつたが、留年したくはないから、しようがない！

私は階段をのぼつた。

だが、私はこの時気づいていなかつた。

今日が12月1日だということを、つまり、31日間もお姉ちゃんのわがままを聞かなくてはいけないということを。

その事実に気づいたのは、もう少し後の話で、すぐさま激しい後悔に襲われたのは言つまでもない。

そんな私に向かつて、

「笑っちゃうくらい、単純よね。美月は。」

とムカつくくらい綺麗な微笑を浮かべて、読み終えた雑誌の片付け

を私に命令した。

幸せだあ…。

甘い香りに包まれながら、私は解放感を感じていた。

家にいるよりもゆっくりで自由な時間を過ごせるのが、学校って…どういうことなのか聞きたいた。

今日は月に2回の料理部。

本日のメニューはカップケーキである。

手軽で持ち帰りやすいため、彼氏がいる子たちの食いつきがよかつた。

私はもちろん、そんな相手はいない。

だが、これでも、天才型の姉より家事能力が高い自信はある。

だてに毎日こき使われてはいない。

むしろ、それくらい誇れるものがなければ、本当に悲しくなつてくる。

「よし、出来た！」

カップに生地を流し入れて、オープンにセットする。あとは15分待つだけだ。

「さすが、美月、手際がいい。」

しつかり者で、この部活の部長の清香きよかに讃められると、純粋に嬉しい。

「本當ほんとう」毎日、朝あさご飯とお弁当作つてあるよなつ……。」

明るい性格で、屈託のない笑みが可愛かわい彩ちゃん。

ほわほわした彩ちゃんは私の癒やしだ。

「お母さんは朝早いからね。お姉ちゃんは朝起きれないから、消去法で私しか作る人いないだけだよ。」

まあ、お姉ちゃんは起きたとしども作る気ないんだろうけど。正直、姉の料理姿は絵にはなりそうだが、まったく想像できない。美月のお姉さん、一回見たことがあるけど、めちゃくちゃ美人だよね。」

「えつー！？清香ちゃん見たことあるの？」

「偶然ね。お姉さんと美月が一緒にいたときに会ったの。優しそう

なお姉さんだったよ。」「

ああ、あの口は上機嫌だったからね…。

面倒くさがりではあるが、社交的なお姉ちゃんを悪く言う人は…私を含め「ぐわづかだ。

私自身、お姉ちゃんの本性を言わないからね。

後が怖いし、言いなりになつてるなんて恥ずかしいし。

「美人なお姉さんとお買い物？」

「確かに、ケーキ食べに行くなつて言つてたよね。」

そう、あの口は衝撃的だった。

私がお姉ちゃんの命令で作ったガトーショコラ。

それをバレンタインに、本命に渡したらしい。

そして、後日、なぜかケーキを奢ってくれた。

渡した人とどうなったのかは、まったく興味なくて聞いてないけど…食べに行つたケーキはおいしかつた。

「お姉さんがいるつていーな。彩は弟しか、いないもん。」「あのね、お姉ちゃんがいたつて、毎回奢ってくれるわけじゃない

よ・彩ひちゃん。」

あの口がお姉ちゃんが私に何かを奢ってくれた最初で最後の口となるかもしれない。

この先の未来に、そんな幻のよつな夢を期待するだけ無駄なのだ。  
せいぜい、一緒に買い物に行つても、荷物持ちにされるのがオチだ。

その光景が簡単に思い浮かぶから、恐ろしい。

「いいなあ。いつの兄貴なんて、自分だけ遊んでばっかりだよ。」「悠希さん?」

清香のお兄さん、悠希さんは私達の2つ上で、今は大学生。

去年、同じ委員会でお世話になつたが、誰にでも優しくて、ノリのいい彼は、年齢関係なく友人が多かつた。

1回、可愛らしさ女性と歩いていたのを見たことがある。

清香には秘密にしつぶさたいのか、私と田があつたとき、とても荒っていたなあ。

「美月、いつの兄貴と美月のお姉さんと交換しない?」

悠希さんとつづのコガママ女王様のお姉ちゃんじや、明らかに割に合わない。

「遠慮しない。」

清香が損するから、と続けようとしたところで、オープンが鳴った。

私はカツプケーキにきちんと火が通っているか確かめるため、竹串を取りに行つた。

「悠希先輩、美月ちゃんの眼中にも入つてないよね。」

「なんか、可哀想だから、美月のカツプケーキを兄貴のお土産に持つて帰つてあげよ…。」

「美月ちゃんも鈍いつていうか、なんていうかね~。」

美味しくできた持ち帰り用の3つのカツプケーキは、清香に1つ（どうしても食べたいらしく）あげた。あと2つは、お姉ちゃんとお母さんが食べた。

「まあまあね。

次に力ツブケーキ作るときは、ココア風味にしてよね。

」

いちいちムカつく感想は余計だつたけど。

## 週末の帰り道

### キンコンカンローン

今日の授業の終了を告げるチャイムが校舎に鳴り響いた。

私の周りの人達は、早々と机の上を片付けて、いそいそと教室を出て行く。

本日、週末。

金曜日の授業は、厳しい時間割でも、明日が休みだと思つと多少の我慢も出来るものだ。

だが、現在の私の心境は正反対だ。

可能ならば、土日も授業を入れて欲しい。

休日は家にいる分、お姉ちゃんからの命令の数がハンパないのだ。

私は先週の土日を思い出し、更に学校に止まりたくなった。

だが、今日はそういう訳には行かないのだ。

「美月～！」これから、美味しい物でも食べに行かない？」

節約家の清香が珍しく、私を誘つてくる。

私は授業中にしかかけない、黒いフレームのメガネをしまいながら、美味しい物という誘惑を振り払つて断つた。

「「めん…今日、用事があるんだあ…。」

これから、私はお姉ちゃんが作る年賀状の手伝いをすることになつていた。

お姉ちゃんが大学から帰つてくるまで」、

送る人の住所をパソコンに打ち込まないと私の休日はなくなつてしまつ。

また、どうでこんなに知り合つてゐるのかといつまでも、彼女の送る相手は多い。

よく言えれば社交的、悪く言えれば外<sup>そと</sup>面<sup>おもて</sup>がいい彼女は、面倒くさがりな癖<sup>くせ</sup>にこじつこじつ」とは忘れないのだ。

それに加え、私も年賀状を作らないとヤバい。

中学の時の仲がよかつた友達に送るだけだが、姉のものに上乗うわのせすれば、また結構な数になる。

機械に弱い私にとって、気が遠くなる大変な作業だ。

「あら、残念。せっかく臨時収入入ったのにな。じゃあ、また今度、誘うね！」

「うん。ごめんね。じゃあね！」

清香に手を振つて、教室を後にした。

はあ…年賀状頑張つて作らないと。

帰り道、私は考え方をしながら歩いて帰ることが多い。

家までの寒い帰路も、考え方をしていれば、意外と早く着くものだ。

それにもしても、本当にお姉ちゃんの命令に振り回されているなあ。

私。

もちろん不本意だけど…住所さえ入力すれば、私の年賀状も「ペー  
しててくれるって言ってたし。

…ええ、それに釣られて今回の命令を遂行することになりましたと  
も。

だって、機械は本当にチンパンカンパンなんだもん。

文字入力くらいなんとか出来ても、「ペー」とか印刷とかはお手上げ  
状態だ。

つていうか、今月は基本的にお姉ちゃんの命令聞かないといけない  
からね。

成績アップのために耐える気でいたが、

今月は…まだまだ半分以上ある。

私は無意識に大きなため息をついて、とぼとぼ歩いて帰った。

## 予定は狂つモノ

…やつと年賀状、出せたあ。

私は解放感を感じ、ポストの前で一息ついた。

只今、土曜日の昼時だ。

私の当初の予定では、今頃は家で課題をやっているはずなのだ。

が、予定は昨日の夜にすべて狂つた。

帰つてからすぐに取りかかつた、住所の入力。

私は挫折しそうになりながらも根気よく続け、最終的に3時間費やし入力を完了した。

あくまで、私はお姉ちゃんが帰つてくるまでに終わらせたのだ。

だが、お姉ちゃんが帰つてきて、入力が終わつたのを報告していたとき、

「美月ちゃん、お父さんと私の年賀状も作ってくれない？」

私よりも機械オンチなお母さんが、まさかのお願いをしてきた。

お母さんがパソコンを使うのは、お姉ちゃんからしたら勘弁してほしいだろう。

パソコンの持ち主はお姉ちゃんだからだ。

お母さんに使わせたら、データが吹っ飛ぶだけじゃなく、最悪、再起不能になるかもしない。

そして、すぐにお父さんやお母さんの年賀状も作るよつこと、ノルマが追加されたのだ。

親戚や友人、知人などお姉ちゃん以上に年賀状を書く2人の年賀状の追加は…正直いじめだ。

最終的に文字入力は日付を越えるまでかかった。

「本当に機械に弱いわよね。私だったら、美月の半分はからないのに。」

朝、お姉ちゃんに皮肉を言われた。

ならば、自分でやれ、と心の底から叫びたくなつたが、理性を総動員させて我慢した。

成長したな…。私。

今、家に帰つてもお姉ちゃんはいない。

大学に用事があるりしく、夜まで帰つてこない。

これから、どうじょうか。

そういえば、シャー芯がもう少しでなくなっちゃうんだよね。

近くの書店によつて行こ。

止まつっていた足を動かし、私は書店へと向かった。

家から歩いて20分で行けるこの書店は、品揃えがいい。

文房具と本を眺めているだけで、1時間は余裕に潰せる。

まだお昼ご飯を食べていないが、軽食を販売しているスペースもあり、不自由はない。

買い物は帰る間際にするのが、荷物が邪魔にならなくていい。

まず、話題の新刊コーナーを見に行こうと、歩き始めたとき、

「美月ちゃん？」

後ろから男の人の呼ぶ声がしたので、振り返った。

私より頭1個分高い身長。

清香と似ている中性的な顔立ち。

髪の毛は黒から濃いめの茶色に変わったが、優しい雰囲気は変わらない。

「悠希さん。」

清香の兄である彼はこいつと笑い、久しづり、と返した。

## 和やかなひととき

まさか、この前の話に出てきた彼に会つとは…偶然とは時に奇妙なものだ。

悠希さんは、今日は彼女さんと一緒にないらしい。

そうでなかつたら、私は彼に誘われていないし、向かい合つてカフェコーナーに座つてもいい。

ここに来るのが始めてだという彼は、とりあえず、私と同じカプチーノをオーダーした。

温かくておいしいカプチーノを飲みながら、私達は他愛もない話をしていた。

話し上手な彼の話は、いつもおもしろい。

去年、委員会で会ったときは、必ず話しかけてくれた。

ふと、そのときのことを思い出して、こんな時間が懐かしいと思えた。

だが、同時に雰囲気やちょっとした仕草に変わったなあと感じるところもある。

もちろん悪い意味ではなく、ただ、大人に近づいているんだなあと思った。

考えてみれば、悠希さんに会つのは久しぶりだ。

6月に清香の家に泊まりに行つたとき以来だろうか。

半年くらい会つていないだけで、こんなにも大人っぽく、頼もしく思えるものなのだろうか。

男の人の変化は侮れない。

それがちょっとだけ羨ましく思える。

私ももう少し身長と胸が成長して欲しかった。

スタイルのいいお姉ちゃんと並ぶと、悲しくなるのだ。

「わうだ。美月、この前のカップケーキ美味しかったよ。」

悠希さんは思い出したように、微笑みながら言った。

「カップケーキ？」

私は話が分からず、少し考えを巡らせた。

ああ、もしかして、部活で作って清香にあげたあれのことかな。

「ありがとうございます。」

悠希さんはカプチーノをぐいぐいと一口飲んで、少し冗談っぽく愚痴を言ひはじめた。

「また美月の作ったお菓子が食べたいな。

去年はもらい放題だったのに、今年はまだカップケーキだけしか食

べてなこよ。」

そりゃあ、今年から大学生になつたのだから、わざわざ渡しには行けない。

そもそも、去年だつて悠希さんにおげよひと頃つてこたわけでない。何人かの女子から貰つたにも関わらず、悠希さんは委員会や帰り道でしつこく催促するのだ。

よほど、甘い物が好きなのだろう。

なにが…と思ひ、悠希さん一いつの提案をしてみた。

「じゃあ、明日、お家にお邪魔してもいいですか？ババロアを作つて持つてこきます。」

実は、明日のおやつにババロアを作るよひとお姉ちゃんから命じられていた。

お菓子づくりは趣味の領域なので、命令をわななくして作ることだつてある。

大抵はお姉ちゃんのリクエストで、作るお菓子が決まるのだ。

清香が確かババロア好きだつたし、兄妹で食べれるなら、ちゅうどいい。

だが、彼は少し皿を見開いたまま固まつている。

応答がない。

悠希さん、ババロアは苦手なのだろうか。

「悠希さんが嫌なら別に…。」

清香の分だけ持つて行きます、と続けよつとしたところで、遮られ  
た。

「「めん」「めん。嫌じゃないよ。ちよつとびっくりしただけで。」

少し顔を赤らめて、彼は弁解した。

私は安心して、笑つた。

「そうですか。じゃあ、少しあめに作るので、清香と一緒に食べて  
くださいね。」

清香にも後でメールで伝えておかないとな。

「…そういうことか。あ、うん。頑張って死守するよ。」

悠希さんは何故か苦笑気味に頷いて、溜め息を小さくもらした。

独り占めにしたいほど、悠希さんもババロア好きなのだろうか。  
似たもの兄弟だなあ、と私はカプチーノを飲みながらじつそり笑つた。

## 聖夜の予定

初雪が降った寒い道を新鮮に感じる。

家からゆっくり歩いて20分、私は清香の家についた。

右手には、今朝作ったババロアの入ったボックスを持つていて。

味にうるさくお姉ちゃんから、おいしいと、嫌みなしの賞賛をもらつたので、きっと2人も喜んでくれると想つ。

チャイムを鳴らすと、清香と悠希さんがいっしょに出迎えてくれた。いくらせつくりな2人でも、いわゆって並んで見るとちょっと違つところもあるものだ。

特に今は、それがはっきりと分かる。

「いらっしゃい。美月、わざわざありがとなー。」

清香の目がめちゃくちゃ輝いている。待つてましたという表情だ。

いつもお姉さんの存在感も、女子高生らしく甘い物には田がないのだ。

下手すれば妹のようだと、私は小さく笑った。

「ううん。これ、お待ちかねのババロアね。」

「やったー早速、切り分けてこよっと。あ、美月あがつてね。」

一気にテンションが上がった清香はすぐに食べりはじめて、キッチンに消えていった。

あの勢いなら、一気に全部食べてしまつかもしれない。

すりっとした長身とスマートな外見に惑わされがちだが、清香は大食いなのだ。

しかも、食べても太らない、一キビもできないといつ、女子なら誰もが憧れる理想的な体質の持ち主だ。

私が作ったワンホールのババロアなんか、余裕で食べれるのだろう。

やれやれという顔してこる悠希さんと田が会い、お互いに吹き出した。

互いに思つてゐたことは同じだったようだ。

「寒かつただろ? 上がつて暖まつてよ。」

「はい。お邪魔します。」

広々としたリビングは暖房がついていて、冷えた身体が喜ぶ。

私はふかふかのソファーに座つて、悠希さんが淹れてくれたカフェオレを飲んだ。

「ふう～おいしい。」

私はため息をつくように零すと、悠希さんは小さく何かを呟いた。

小さすぎて聞こえなかつたが、私は特に気にせず、悠希さんにカフェオレのお礼を言った。

「苦くないか? ミルクが足りなかつたら、言つてな。」

私は苦いコーヒーが飲めないので、いつもミルクと砂糖を自分で入

れるのだ。

去年に何回かお邪魔に来たから、私の好みを覚えていてくれているのか、甘えさせてもらひたい。

「大丈夫です。」

「そつか。」

彼は「ヒーヒーを一口だけ口に含んで、少し考えたよつて言った。

「…あのせ、美月はクリスマス空にてる?」

クリスマス…。

イブの晩は清香と彩ちゃん遊びに行く予定だ。

ケーキバイキングの招待券を3枚ゲットしたとのことで、彩ちゃんに誘われたのだ。

そして、夜は家族で「駆走を食べたりする」となつてゐる。

けど、次の日、クリスマスの予定はがら空きだ。

お姉ちゃんは「一日遊びに行くから、家で特にやることもないだろう。

「空いてますよ。」

私がそういつと、彼の表情が一際明るいものに変わった。

クリスマスに何があるのだ？

私が疑問に思つていると、悠希ちゃんは「ひとつ笑つて言つた。

「じゃあ、今日のババロアのお礼をしたいから、一日あけておいてね。」

「お礼なんて……。」

ただの趣味で、しかも姉の命令ついでに作ったのに、お礼なんて申し訳ない。

私はすぐに遠慮した。

「友達がバンドやっていて、クリスマスライブやるらしいんだけど、1人で見に行くのは淋しいんだよ。  
大したお礼じゃないけど、美味しいもの奢るしさ。」

彼は少し焦ったように囁いてきた。

やつこつ風に言われると、断れないなあ。

…決して、美味しいものに釣られたわけではない。

私は彼の誘いを受けることにした。

「分かりました。よろしくお願ひします。」

彼の優しさに私は自然と頬が緩んだ。

ふと、悠希さんの彼女さんにちょっと悪いなと思つた。

きっと、クリスマスは都合が悪くて一緒にに行けないのだろう。

「けど、悠希さん。彼女さんがいるんですし、無闇に他の人を誘っちゃダメですよ。」

私はからかい半分、忠告半分で、彼に言った。

瞬間、コーヒーを飲んでいた彼は突然激しく咳こんだ。

その普通じゃないむせよに、私は驚き、

「だ、大丈夫ですか？」

と、恐る恐る声をかけた。

彼はめりめり苦しそうにして、何かを訴えるように私を見た。

な、何かまざることを言つてしまつたのだらうか。

私は少し焦つて、彼に聞いてみようとした。

が、

「はあ！？兄貴、彼女いるの？ー？」

リビングのドアを勢いよくあけた清香の声にびっくりして、私も悠希さんも言葉を失った。

切り分けてきたババロアをテーブルに置いて、清香は彼に少しつつ上がった皿をむける。

盗み聞きしていたのか、聞こえたのか、清香は悠希さんに疑問を投げかけた。

「ちよつと、どうしてー?」

清香はなぜか怒ったように、悠希さんへ疑問を投げかける。

だが、なぜそこまで清香が怒りをあらわにしてこのか分からない。

私もお姉ちゃんに彼氏がいたと知ったら、驚きはするだろう。

けれど、怒ったりとかはない。

むじん、相手の男性を崇拜したい気持ちで満たされる」と間違いなしだ。

私は「」の事態がよく分からず、交互に2人を見た。

。

「清香、ちょっと落ち着いてくれって。」

やつと普通に呼吸ができるよくなつたらしく、悠希さんが清香をソファーに座るように促した。

清香はつづつ上がつた皿をそのままにして、しぶしぶ私の隣に座つた。

彼は少し困つた顔で、私に聞いた。

「えつと…美月、どこから俺に彼女がいるって話を聞いたの？」

「聞いたも何も…6月に悠希さんと映画館で会つたとき、一緒にいたじゃないですか。」

あれは…私が中学時代の友達と映画を見に行つた時だつた。

映画を見終わつて、帰つたとき悠希さんを見つけて、私が声をかけた。

そのとき、彼の隣に清楚で可愛らしい女人の人があったのだ。

私は「デートなのだろう」と思つて、挨拶だけして帰つたのだが、彼は覚えていなかつたのだろうか。

私は悠希さんをちらつと見た。

少しの間、記憶をたどつた彼は、思い出したようで、あれか、と咳いた。

私が小さく頷くと、悠希さんはちよつとだけため息をついて、苦笑を浮かべた。

「兄貴、思い当たるふしでも、あるわけ？」

しばらく黙つていた清香がしひれを切らしたよつで、悠希さんに聞いた。

「あの日、一緒にいた人は友達の彼女だよ。」

「友達の彼女？」

清香が意味が分からぬといふ風に聞き返す。

私もイマイチよく分からぬ。

「美月はちゅうどタイミング悪くて会わなかつたみたいけど、本當は俺の友達と3人で見に行つたんだよ。

…清香、あいつのことだよ。晶の彼女、知つてゐるだろ？」

清香はそれを聞いて、納得したような顔をした。

きっと、清香はその悠希さんの友人を知つていたんだひつ。

テーブルの上のババロアに手をのばしながら、

「なあ～んだ。慌てて、損しちやつた。」

と、清香がいつもの調子で言つた。

「俺は今、付き合つてる人はいな～よ。清香、当たり前だらうが。」

悠希さんは少し呆れたように、清香に言つた。

なんだか…私だけ会話についていけない。

今までの話をまとめると、

映画館には友達、友達の彼女、悠希さんの3人で行っていた。

そして、悠希さんには現在彼女がないらしい。

それは、つまり…

「私の勘違い？」

「まあ、簡単にまとめるといつこいつよな。」

清香はせつしに、ババロアを口に入れた。

私は少し恥ずかしくなりながら、悠希さんの方を見た。

「ということだから、安心して、クリスマスは誘われいやつよ。」

悠希さんは笑いながら、私に言った。

勘違いで、2人を振り回してしまった私は素直にはい、と返事をするしかなかった。

## 鋭い姉と鈍い妹

天気が荒ってきた。

水っぽい雪がぴちゃぴちゃと降っている車窓の外を見て、私は悠希さんに車で送つてもらつてよかつたと思つた。

雲行きが怪しいから、と車を出してくれた彼の優しさに私は心から感謝した。

「今日はありがとうございます。ババロア、本当にありがとうございました。」

私の家について、彼は言った。

清香と悠希さんは実際に味わつて食べててくれて、作ってきてよかつたなと思った。

特に清香の食べっぷりは、ひと切れ食べた私が見ているだけでお腹いっぱいになるほど、素晴らしいだった。

「喜んでもらつてよかったです。」

お姉ちゃんのために作ることが多いお菓子だが、

彼女は基本的に文句、しかも、「砂糖が多いわよ。私を太らせる気？」と、自分中心的なことしか言わない。

だから、2人のような反応は本当に嬉しかった。

「送つてくれてありがとう」といいました。」

「どういたしました。」

悠希さんは爽やかに笑う。

助手席に座っていた私は、今更彼との距離が近いんだといつこと気づいた。

意識した途端、私は何故か彼を直視出来なくなつた。

勝手に気まずさを感じた私は、急いで車から出ようとしたが、悠希さんに引き止められた。

「『めん。帰る前にもアド教えてくれないかな？クリスマスのこと、後で詳しく連絡したいからさ。』

ああ、と思い、私は携帯をポケットから取り出す。

音楽を聴くことが好きな私だが、バンドの演奏を生で聴いたことは1回もない。

気に入ったバンドのCDを買って聴いたりするだけだったので、実は誘われて嬉しかった。

プラス、美味しいものを奢つてもらひえるなんて…私の方が得しきすぎだ。

悠希さんに悪いから…また今度、お菓子を作つて、持つて行こうかな。

私達はお互いのメアドを交換し終わって、携帯をしました。

「クリスマス、楽しみにしますね。じゃあ、また今度。」

私は車から降りて、急いで雨が当たらなこところへ走った。

車の中にいた彼はしばらく田を見開いていたが、すぐに嬉しそうに笑った。

私は手を振つて、彼と別れた。

「ただいまー！」

私はリビングのドアを開けてから、言った。

お母さんはキッチンで夕食を作つてゐるらしく、リビングにはお姉ちゃんしかいない。

私はクリスマスのことを、一応お姉ちゃんに言つておかないどだな  
と思って、声をかけた。

「お姉ちゃん、私もクリスマスは予定入つたから、その田は何も頼  
まないでね。」

ソファーにもたれかかりながら雑誌を眺めている彼女は、チラッと私の方を見た。

「誰かと出かけて来るの？」

「うん。清香のお兄さんとバンドの演奏を聴きに行くの。」

私は楽しみだなあといつ思つから、ついついテンション高く答へてしまつた。

「へえ～。」

お姉ちやんは少し一やつとして、言つた。

なんだなんだ。

その面白いものを見つけた子供よつな笑みは。

嫌な予感しかしないのは、私の氣のせいではなこと思ひ。

「美月はその人のことをどう思つてるわけ？」

はい……？

投げかけられた言葉の意味が瞬時に理解できなくて、私は固まつた。

私がすぐに答えられず、黙つていろい、

「あんたって…本当に鈍いわよね。」

つまらないわ…と呟いて、お姉ちゃんは視線を雑誌に戻した。

小馬鹿にしたような態度のお姉ちゃんに、いつもならムカつくはずだが、今はそんな気持ちにはならなかつた。

ただ、考えた。

『悠希さんをどう思つてゐるか。』

なんで、そんなこと聞いたんだろう…？

「どうこの意味を含んでお姉ちゃんは聞いたんだ？」

私はモヤモヤした気持ちのまま、携帯に登録されたばかりの悠希さんのアドレス眺めていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4562z/>

---

対照的な姉妹

2011年12月21日22時50分発行